

堀川を開削した福島正則

幹線輸送路として名古屋の人々や産業を支えてきた堀川は、福島正則が御普請総奉行となって開削した。

正則は永禄4年(1561)に、二寺村(現:あま市)で、大工(あるいは桶屋)の息子として生まれたと伝えられている。また、秀吉とは従兄弟(母が秀吉の叔母)同士という説がある。幼少の時から秀吉に仕えた、あるいは12歳のとき大工とけんかをして殺してしまい、故郷に居れなくなり出奔して後に秀吉に仕えたとも言われている。生まれた年は桶狭間の戦いの翌年であり、戦国の世の風を浴びながら成長し時代の寵児となっていった。



出世の糸口は賤ヶ岳の戦いだ。天正11年(1583)、信長亡き後の主導権を争って、秀吉と柴田勝家が賤ヶ岳(現:長浜市)で合戦となった。23歳の正則は加藤清正などとともに大きな戦功をあげ、「七本槍」の筆頭として5千石を拝領する。

天正15年の九州討伐後には伊予の国11万石の領主となり、文禄の役(1592~3)では忠清道(現:韓国中西部)を担当している。文禄4年(1595)には、故郷の尾張に24万石が与えられ、清須城主になっている。

慶長3年(1598)に、正則を引き立ててきた秀吉が亡くなり、5年に関ヶ原の戦いが起きた。正則は石田三成と仲が悪く、率先して家康方の東軍に参戦。苦戦のなか大きな犠牲を出しながらも宇喜多秀家の部隊を破り、東軍の中でも第一の働きとたたえられた。この功績で、広島と鞆(現:福山市)を領有する49万8千石の大大名になった。正則は剛勇・剛直をもって知られ、戦場を駆け巡ることで40歳にして絶頂期を迎えた。



広島城主だった慶長15年(1610)に名古屋築城があり、正則も御手伝普請を命じられた。堀川開削工事の御普請総奉行とともに名古屋城の石垣築造を分担している。史実かどうかは不確かだが、『武徳大成記』に正則が「お手伝普請が多い。江戸城などは仕方ないが、庶子のための名古屋城まで手伝わされるのはかなわん」と不満を漏らしたところ、清正が「いやなら国に帰って兵を挙げればよい。それができなきゃ不平を言わず働くしかない」と諭したという話が載っている。

慶長19年になるとついに大坂で戦端が開かれた。冬の陣も翌年の夏の陣も、謀叛を警戒する家康は正則を江戸におき、子の忠勝が大坂に従軍している。豊臣氏の滅亡により、応仁の乱から150年続いた戦国の世は終わった。夏の陣の後、元和に改元され元和偃武^{えんぶ}と呼ばれる平和な時代が始まる。戦に強い武将は必要がないだけでなく、幕府にとり危険な存在となった。



福島正則終焉の地 長野県高山村

元和3年(1617)、広島城は洪水で大きな被害を受け、修築を幕府の許可を得ずに行ったという口実で、正則は5年に改易された。信濃の高井野村(現:高山村)に陣屋を構える高井野藩主となり、所領はわずか4万5千石の大名である。翌6年には、息子の忠勝が早世し、2万5千石を返上して2万石となり、寛永元年(1624)失意のなか死亡した。

高山村には茶毘にふした土地が保存され供養塔と説明板が立っている。それによると自刃とされている。